

諸国産物帳にみる対馬国「孝行いも」の実態について一考察 —江戸期の日韓食文化交流—

熊本県大津町「明日の観光大津を創る会」
会員

にしむら かずまさ
西村 和正

1 はじめに

いも類振興情報（No150,2022.1）で、安田健氏の「享保20年（1735）諸国産物帳に現れた甘藷の記事」を紹介したが、その中に対馬国の「孝行いも」と「あかいも」があった。

対馬国の「孝行いも」の由来について二つの見解がある。一つは、農政学者陶山鈍翁（すやまどん）の教育をうけた伊奈郷久原村の原田三郎右衛門が正徳5年（1715）に薩摩に潜入して種芋を持ち帰り、普及した芋を孝行芋という¹⁾。二つ目は、原田三郎右衛門の薩摩から種芋が持ち込まれたとする説は伝承の域を出ないとし、対馬への導入は藩庁記録の「毎日記」（正徳4年）に記載されている琉球芋が長崎役ルートによって対馬に伝来された芋を孝行芋という²⁾。

*長崎役とは長崎の対馬屋敷に派遣され情報収集や長崎奉行との折衝を勤めた間役のこと。

今回、日韓食文化交流を副題としているが韓国語で「コグマ」と呼ばれる、さつまいもは日本から韓国に伝わったもので、その呼名は日本語の「孝行いも」が語源とされる。

拙稿では、「孝行いも」の実態を考察し、併せて「孝行いも」が果たした日韓の食文

化交流について報告するものである。

2 江戸期の対馬の孝行芋

陶山鈍翁（訥庵）は1675年対馬藩に出仕、朝鮮支配佐役などを経て1699年郡奉行に就任、猪狩策など積極的に農政策で功績、側用人退任（1712年）後は農政や外交・歴史などの著述に専念、世に農聖・対馬聖人と仰がれた³⁾人物である。

（1）陶山鈍翁と原田三郎右衛門との関係

陶山鈍翁の甘藷関係の著作物の中には、別紙1の甘藷関係史料（年代順）の⑥「のうるいご老農類語」と⑦「くりこうこういもうえ甘藷説」と⑧「たてげちおほえがき栗孝行芋植立下知覚書」があるが、農政学者の鈍翁は、別紙1の①「本草綱目」・②「農政全書」・③「農業全書」を学び、山畠の多い対馬での食糧不足解消対策に甘藷栽培が適すると考えていることがわかる。

まず「老農類語」（1722年）の「解題」⁴⁾には、鈍翁が、郷村の老農たちが行なっている農事・農作十二種について記したもので、特に後世まで影響を与え、対馬の主生産品となった甘藷の栽培は、鈍翁の奨励によるものであった⁵⁾とある。その別紙1の⑥「老農類語」（1722年）の中に「孝行芋」の項があり、「此ノ芋ヲ正徳五年（1715）以来毎年種フル」「是州ニテは初メテ孝行

別紙1 甘藷関係史料（年代順）

No.	年代	出展本	著者名	内 容（一 部）棒線は筆者引く。	典 拠
①	1596年	本草綱目	李時珍 (1518-1593)	菜部卷二十七「甘藷」集解時珍曰く、按ずるに陳祈暢の異物志「甘藷は交、廣の南方に産し、民家では二月を以て種ゑ、十月に収穫する。その根は大なるものは鶩卵ほど、小なるものは雛、鴨の卵ほどで、紫皮を剥き去ると肌肉が正白で肪のやうだ」又按ずるに稽含の草木状「甘藷は薯蕷の類である。或は芋の類だともいふ。珠崖は耕作を業とせぬものがただこれを種ゑ」	『頭注国訳本草綱目』（白井光太郎監修、春陽堂書店）
②	1639年	農政全書	徐光啓 (1562-1633)	甘藷（即俗名紅山薬也） 玄扈先生曰藷有二種其一名山藷閩廣故有之其一名番藷則土人傳甘藷十三勝 一つ、一反に四、五〇石はとれる。二つ、色が白く甘く。三つ、薬になる山芋に同じ。四つ、茎を切り分けておく、翌年は二、三十町分種藷がとれる。五つ、枝も蔓も地に這い、節に藷を生じ、風雨にいためられることがない。六つ、五穀と同じだから、飢饉を逃れる。七つ、神仏への供え物、煮物、料理、菓子にしてもよい。八つ、酒を造ることができる。九つ、乾燥貯蔵し食物、粉にして餅のきなこの代用。十、生でも煮ても食べられる。十一、狭い土地でも多収。十二、春夏に植えて冬の初めに貯蔵、茎葉はさわめて繁茂する。十三、虫害のひどい年でも損害をうけることはない。	文淵閣四庫全書第731冊和訳は日全二十卷「農業全書卷5」より
③	1697年 (元禄10)	農業全書	宮崎安貞 (1623-1697)	蕃藷（あかいも・ばんしょ・りうきういも） 此藷に二種あり。一種を蕃藷と云。一種を山藷と云。蕃藷は其形丸く長し。山薬（やまのいも）の形に似たり。蕃藷今長崎に多く作る。山藷は形、里芋のように味劣る。蕃藷は皮の色薄紫、肉は純白、味甘く、菓子や料理に用いてよし。蕃藷は国民の食糧不足の場合に非常に助かる。薩摩や長崎では琉球芋、又赤芋といって多く作っている。	日本農書全集第12巻「農業全書卷5」
④	1709年 (宝永6)	大和本草	貝原益軒 (1630-1714)	蕃薯（外）りうきういも・あかいも 閩書曰。萬曆中。閩人得之外國。皮薄而朱 今案、此物長崎に多し。甘藷（しょ） 蕃薯の類にて別。倭俗つくねいもと訓す。誤り。つくねいもは佛掌薯也。甘藷は蔓草也。根は、瓜蒞根の似たり。飢饉を救う。其利益大なり。根を生にて食し、蒸して果として食す。味甘美にして栗の如し。	益軒全集卷之六明治44年
⑤	1717年 (享保2)	番藷録	松岡玄達 (1668-1746)	番藷（又作蜜薯）一名甘藷、その赤きは朱藷と名す。和名琉球芋、又の名は薩摩芋、赤芋。案ずるに番藷その種琉球国に原出す。本邦の所有するは、黄朱の二種のみで薩州に唐芋・りきん芋（琉球）の二品ありと。りきん芋は栗芋で白芋類か。彼の地方の人に訪問するに唐芋といえるは即ち蕃藷の別名なり。京都の南部山城の邑及び和州木津、摂州、天王寺の辺、紀州・讃州・肥前長崎には、特に多く作りて、京都周辺へ出す。	山田尚二氏『さつまいも』伝来と文化、春苑堂
⑥	1722年 (享保7)	老農類語	陶山鈍翁 (1657-1732)	孝行芋 此ノ芋ヲ正徳5年（1715）以来毎年種フルニ、是州ニテは初メテ孝行芋ノ種子ヲ他方ヨリ求メ来タリ、種フル道ヲモ伝ヘ来タレバ、伊奈郷久原村ニ生レテ、其後府中ニ住セシ三郎右衛門トイフ者ナリ、是ノ者モ州ニ功アル人ノ徒ナリト云フベシ	『日本経済大典第7巻』瀧本誠一編纂（昭和41年）
⑦	1724年 (享保9) (1715年前後作とも)	甘藷説	同上	甘藷ハ本草綱目ニ記ス名ナリ、農業全書ニ農政全書ヲ引キテ、蕃藷ト記シ、甘藷ノ名ヲ記サズ、然レドモ蕃藷ハ、即チ甘藷ナリト見ヘタリ、本草綱目ニ草木状ヲ引キテ、甘藷ハ根モ葉モ芋ノ如シト記シ、農業全書ニ葉ハ蔓（朝顔）ニ似タリト記セリ、土地ニ依リ長茄ノ種子ヲ種ヘテ圓茄ニ成リ、赤蕪菁ノ種子ヲ種ヘテ白蕪菁ニ成ルナレバ、形色ハ少シク異ナルコトアリトモ、気味ノ異ナラズバ同物ナリト知ルベシ、甘藷ト名ヅクルハ、味ヲ以テ名ヅケ、蕃藷ト名ヅクルハ、其ノ始メ外国ニ生ジタル故ナラン、本草綱目ニ異物志ヲ引キテ甘藷ハ交廣南方ヨリ出ルト記シ、農業全書ニ閩書ヲ引キテ、万曆年中閩人コレヲ外国ヨリ得来ルト記シ、薩摩長州ニテハ琉球芋トモ云ヒ、赤芋トモ云フト記セリ、赤芋ト名ヅクルハ色ヲ以テ名ヅケ、琉球芋ト名ヅクルハ、長崎ニ種子ヲ琉球ヨリ得来ル故ナラン、俗ニ孝行芋ト名ヅクルハ、昔貧家ノ孝子ノ山ニ行キケルニ時、芋アルヲ見付ケ、掘リ取り帰リテ種ヘ廣メケルユヘ、天ヨリ孝子ニ賜ヘル福ナリトテ、孝行芋ト名ヅクルト云ヘリ第一條 本草綱目ニ異物志ヲ引キテ、甘藷ハ二月ニ種ヘ、十月ニ取ム、根ノ形チ芋ニ似タリ、大ヒナル者ハ鶩卵ノ如ク、小サキナル者ハ雛卵鴨卵ノ如シ、紫皮ヲ剥キ去レバ、肌肉正白ナリ、南人コレヲ米穀ニ當テ果ニ當ツ、蒸シタルモ、炙リタルモ、香シクシテ美ナリ、初メテ取メタル時ハ甚ハ甘甜シ、久シキヲ経テ風ヲ得レバ稍ヤク淡シト記シ、草木状ヲ引キテ、甘藷ハ薯蕷ノ類ナリ、赤芋ノ類ナリ、根ノ大ヒナル拳ノ如シ、甌ニテ蒸シ煮テ食ス、薯蕷ト同じ味ナリ、性ハ甚ハタ冷ナルニテナシ、珠崖ノ耕ヲ業トセザル者は、惟ダ此レヲ種ヘ、蒸シ切り晒シテ取メ、糧糗ニ充テ諸糧ト名ヅク、海中ノ人ノ多く寿ナルモ、五穀ヲ食セズシテ甘藷ヲ食スル故ナリト記シ、気味ハ甘平ニシテ毒ナシ、主治ハ虚乏ヲ補ナヒ氣力ヲ益シ、脾胃ヲ健ヤカニシ、腎陰ヲ強クシ、薯蕷ト功ヲ同ジクスルト記セリ第二條 農業全書ニ農政全書ヲ引キテ、蕃薯ノ形チ山芋ニ似テ色ハ紫ナリ、皮ウスク内イサギヨク色白シ、味ワヒ山芋ヨリハ甘シ、菓子ニモ成リ、種々ノ料理ニシテ宜シ、多ク作クレバ民食ヲ足シ、久シク食スレバ命長ク、出来ノ多キニテ其ノ国ヲ賑フ、徳ノ多クシテ損ノナキ物ナリ、根ハ地ニ依リテ大小長短アリ、蒸シテモ食シ、炙テモ食シ、生ニテモ食ス、淨ク洗ヒ細カニ切り、精米ノ如クシテ蒸シ晒シ、貯ワヘ置キ飯ニスルユヘ、是レヲ藷根ト云フト記セリ第三條 医師香月氏ノ著ワセシ巻懐食鏡ニ、甘藷蕃藷ヲ二物ト為シテ記セリ、此ノ物ノ名ハ藷ナリ、味ノ甘キヲ以テ甘藷ト謂ヒ、其ノ始メ中国ニ生ゼズ、外国ニ生ジタルヲ以テ蕃藷ト謂フ、本草綱目ニ甘藷ト記シ、農政全書ニ蕃藷ト記シタルドモ、細カニ切りテ蒸シ晒シタルハ、二書ニ同じク藷根ト記セラルレバ、一物ナルコト明ラカナリ、是州ノ府中ニテノ説ニ、腫物アリ小瘡アル者ハ、諸ヲ食シシテ害アリ、蜜柑ト同時ニ食スレバ害アリト云ヘリ、右ノ説ハ他方ニテモ、是州ノ郷村ニテモ、云ザルコトナリト聞ク、腫物小瘡ハ藷ニ限ラズ、禁ズル物アルナレバ、腫物小瘡アル人ハ藷ヲ食セズシテ可ナラン、蜜柑ト同時ニ食シテ害アリシト云フ説アラバ、同時ニ食セズシテ可ナラン第四條	『日本経済大典第7巻』瀧本誠一編纂（昭和41年）、明治文献、451～453頁
⑧	1724年 (享保9)	栗孝行芋植立下知覚書	同上	孝行芋は味あまく、もたれつきも物なれば、糯米も性に似たと見えたり、糯米は小瘡あり、腫物ある時に忌むなれば、孝行芋も其心得て食すべし、食してもたるるなれば、貧からぬ人と、賤しからぬ人の食すべき物にあらず、	同上「八巻」（昭和41年）

芋ノ種子ヲ他方ヨリ求メ来タリ、種フル道ヲモ伝ヘ来タレルハ、伊奈郷久原村ニ生レテ、其後府中ニ住セシ三郎右衛門トイフ者ナリ、是ノ者モ州ニ功アル人ノ徒ナリト云フベシ」という。

次に熊本大学名誉教授森山恒雄氏執筆の「日本近世人名辞典」⁶⁾によると、「栗孝行芋植立下知覚書」(1724年)は、鈍翁が郡奉行時代に農村に示達した政策であるが、以後の対馬藩農民の主食料品となった薩摩芋の輸入・奨励策であったという。また、孝行芋の由来は、鈍翁の別紙1の⑦「甘藷説」(1724年)によると、「俗ニ孝行芋ト名ヅクルハ、天ヨリ孝子ニ賜ヘル福ナリトテ」とあるが、これは三郎右衛門の功績を評していると推察する。

ところで、「甘藷説」によると「蕃藷、薩摩長州ニテハ琉球芋トモ云ヒ、赤芋ト名ヅクルハ色ヲ以テ名ヅケ、琉球芋ト名ヅクルハ、長崎ニ種子ヲ薩摩ヨリ得来ル故ナラン」と説明している。また、⑧「栗孝行芋植立下知覚書」には孝行芋は、味あまく、糯米^{もちこめ}も性に似たと述べている。本草学者^{ほんぞう}の稻生若水^{い の う じゃく す い} (1655-1715)は、赤イモは粘質で下品とし、白イモ^{ふねん}を不粘(粉)で上品とし、不粘^{うるち}を梗、粘^{もち}を糯に分類している⁷⁾。従って、糯性の孝行芋は味の甘い、赤イモと考える。

(2)「毎日記」(藩庁)にみえる琉球芋・孝行芋について

対馬の甘藷の関係史料には、対馬藩が作成した「毎日記」(藩庁)が、平成5年『峰町誌』「九 孝行芋の導入と農書の配布」に登載されているので抜粋して紹介する。

(棒線は筆者が引いたもの。)

1. 『郡方日帳書拔』正徳四年甲午(1714)十一月十三日

々 長崎役方より琉球芋小数千三百調へ渡され候に付、八郷の内村々へ差し下し、植させ候様仕るべき旨申上げ候事

これによって11月13日に長崎役方から、種芋1300個が調達されて届けられたこと、郡奉行所では八郷に配分して来年春植付させるようにしたい旨を郡支配に伺ったことがわかる。

2. 『郡方毎日記』 正徳五年十月廿二日 兼々噂申し聞かれ候唐芋の儀、以前御郡方走り番勤め候三郎右衛門と申す者、当年伊奈郷久原村に植付け、余程作徳これ有る由に付、彼の者を御郡役所へ召寄せ、種の嗜み様並びに植付けの次第、(略)、芋種を三四百斤の間、三郎右衛門方より郷中用銀を以て相調え、(以下略)。

3. 『郡方毎日記』 正徳五年十二月朔日 唐芋種来春八郷へ植付させ候儀に付、原田三郎右衛門を郷々へ差し下しいたさせ候趣、覚書にいたし八郷へ触下し候書付左にこれを記す。

覚

去年唐芋の種を八郷へ指し下し候得共、悉く損じ生育致さず候。当年久原村へ三郎右衛門と申す者作り候所、出来能く殊の外作徳これ有り候に付、種を相調え八郷へ相渡し、植付けさせ申すべき由、(後略)

覚書の冒頭の記事から、前年(正徳4)に藩が長崎で調達して配布した、

種芋の植立ては成功しなかったことが明らかになる。

4. 『毎日記』 享保七年（1722）八月九日

平田隼人殿（御郡支配）内野市郎左衛門（郡奉行）へ仰せ渡され候は、先年八郷へ孝行芋種御渡し成され、生育宜しき村もこれ有り、（後略）

5. 『毎日記』 享保八年八月二五日

御郡支配平田隼人から三郎右衛門に対する「御郡中よりの合力」についての指示のなかに、「三郎右衛門と申す者、他方より孝行芋の種子を買い来り、植え様をも伝へ来り、御郡中に教へ候て植へさせ候より起りたる事」という。

6. 『毎日記』 享保九年八月八日

三郎右衛門孝行芋を作り立て、其の上雇われ候て八郷へ廻し、今程普く植へ立て、百姓益を得候（略）、三郎右衛門他国へ罷り越し、孝行芋の種を買い調べ、植へ様等を習い来たり候

7. 『毎日記』 享保九年八月一九日

初めて後世「孝行芋銭」とも呼ばれた合力銀の徴収基準が定められて、年額900匁ほどが各郷草使から三郎右衛門及びその子孫に渡され、その内の半額は三郎右衛門に対して資金を提供した者たちに与えられることになる。

8. 『毎日記』 安政五年（1858）

孝行芋屋常二郎は「今程家別三分宛の取立を二分増し年五分宛の取立」を願い出て聞き届けられ、年寄中か

ら郡役へ申し付けている。

これらによって、この合力銀は孝行芋銭の名によって、明治4年（1871）の廃藩の日まで、約150年間続けられた。

（以上『峰町誌』から）

ところで、佐々木道雄氏の「サツマイモとジャガイモ」『新コリア百科』⁸⁾によると、朝鮮の農書『増補山林経済』（1766年）に、「このイモを耕作する者は、初めてこれを移入した家に、毎年五文ずつ支払っている」とある。サツマイモ栽培の定着の様がうかがわれる。サツマイモに対する人びとの恩がいかに大きかったかがよく理解できると述べる。

3 享保元文諸国産物帳集成「対馬国」の甘藷について

別紙2の『享保元文 諸国産物帳集成 第XI巻対馬・肥前』⁹⁾のI「対州并田代産物記録」をみると、あかいも（『大和本草』菜類に言蕃薯）と孝行いも（薩摩いも又琉球いもとも言。『大和本草』菜類に言甘藷）が記載されている。田代は、対馬藩が肥前国田代（鳥栖市東部ならびに基山町）を治めていた場所を指す。

また、別紙2のII享保20年（1735）「対馬国八郷別産物覚帳吟味帳」をみると、赤芋は、「ほうどう共」と言っていることがわかる。実は、周防国の「享保元文 諸国産物帳集成」（275、378頁）にも、「赤芋唐芋共須知紫芋茎ヲボドウト云」がある。この茎ヲボドウという赤芋は唐芋共須知紫芋とよばれているため里芋類である。よって、同I「対州并田代産物記録」のあかいも（『大和本草』菜蔬類にいう、蕃薯）」は里芋類とみる。

別紙2 『享保元文 諸国産物帳集成 第XI巻対馬・肥前』(芋類抽出)(現代語は対州産物読み下しより)

I 対州并田代産物記録 79頁		一あかいも 一孝行いも	大和本草薬蔬類に言蕃薯。 薩摩いも又琉球いもとも言。 大和本草薬蔬類に言甘藷
II 享保20年(1735)「対馬国八郷別産物覚帳吟味帳」			
①	対州并田代産物記録	213頁	一芋 白いも 赤いも はすいも くりいも
②	享保二十乙卯年九月 産物覚帳 佐護郷	267頁	一芋類 赤芋ほうとう共 栗芋 ゑくり芋 真芋 蓮芋 山芋 つくね芋 孝行芋
③	享保二十年乙卯八月 佐須郷 産物覚	328頁	一芋類 里いも くりいも 赤いも まいも ゑくり はすいも はいいも 孝行芋但さつまいも共言
④	享保二十乙卯年六月 産物覚 豊崎郷	390頁	一芋類 ま芋 栗芋 ほうとう ゑくり かうかう芋
⑤	享保二十年乙卯七月 伊奈郷 産物覚帳	442頁	一芋類 赤芋但ほうとうと言 栗芋 真芋 ゑくり芋 蓮芋 琉球芋 孝行芋
⑥	享保二十年乙卯八月 産物帳 仁位郷	520頁	芋類 赤いもほうとう共言 くり芋 真いも ゑくりいも 孝行芋食用に無類之物也
⑦	産物覚 三根郷	582頁	芋類 山いも 孝行いも 赤いもほうとうとも言 ていらいも くりいも つくねいも ゑくりいも はすいも、白いも真いもとも言
⑧	享保二十乙歳八月 豆酩郷 産物覚帳	610頁	芋類 一しまいも 一くりいも 一まいも 一あかいも但ほうとう共 一孝行芋但し唐芋共

* 出典：『享保元文 諸国産物帳集成 第XI巻対馬・肥前』
(編者盛永俊太郎・安田健、発行所科学書院、1991年)

次にIIの「対馬国八郷別産物覚帳吟味帳」には、孝行芋(かうかう芋)は7郷全てにみえる。IIの③佐須郷産物覚には、「孝行芋 但さつまいも共言う」、同⑤伊奈郷産物覚帳には「琉球芋 孝行芋」、同⑧豆酩郷産物覚帳には「孝行芋 但し唐芋共」とある。

また、対馬国の近隣の壱岐国(肥前平戸藩領)の産物帳にも、「唐芋 蕃薯一名琉球芋一名孝行芋 一名薩摩芋」¹⁰⁾とあり、別紙1の③「農業全書」にある、蕃薯(あかいも・ばんしょ・りうきういも)であり、肉は純白、味は甘い芋である。対馬と同じように、孝行芋、薩摩芋の名前が出ているため、対馬から移入されていると考えられる。

このように、産物帳には、藩庁の「毎日記」や陶山鈍翁「老農類語」になかった、「さつまいも」の名前があることが判明したのである。

4 対馬藩内の唐芋の入手先について

前掲第2章(2)「毎日記」(藩庁)にみえる琉球芋・孝行芋について(以降、前掲(2)「毎日記」と略する。)項で、琉球芋、唐芋、孝行芋の名が出ている日記を紹介した。前掲(2)「毎日記」の2.『郡方毎日記』では、原田三郎右衛門(御郡方走り番)が久原村に植えた唐芋の収穫があったことが記載されているが、その唐芋に関する薩摩島津藩の史料を紹介する。

宝永七年(1710)「島津家列朝制度卷之八(406)」『藩法集8』¹¹⁾

一 御分国中土産

野駒 茶入 茶碗付皿之類 桜島
蜜柑 七島鯉節 赤貝塩辛 小熬
海鼠 依黄 樟腦 生蠟 檜子
米 粟 黍 稗 大豆 麦 蕎麦
大角豆 八重成 小豆 胡麻 唐
芋 酒 菜種子 麻 芋 (略)

右之内、所ニより、植不申物も御座候、上方並長崎へ差越賣拂、江戸入用續方仕候ハ、米・菜種子・生蠟・樟腦・迄ニ御座候、此外他国出之儀無御座候、(略)

この宝永七年「島津家列朝制度 卷之八」の御分国中土産に、唐芋の名前がみえる。唐芋も、「上方並長崎へ差越賣拂」とする対象となっている。

また、松岡玄達の別紙1の⑤「番諸録」(1717年)をみると、薩州には唐芋とりきん芋(琉球)の二品があり、唐芋は蕃薯の別名で、肥前長崎には特に多く作りて京都周辺へ出している。蕃薯一名甘薯は赤芋で、和名琉球芋、又の名は薩摩芋という。りきん芋(琉球)は白芋類で所謂栗芋、本邦には、黄朱の二種のみで、黄を白芋と呼ぶと述べている。

従って、対馬藩内の琉球芋(唐芋)の入手先は長崎とみるべきである。

5 孝行芋は誰が伝えたのか

まず、長崎役甘薯伝播の根拠を提示しているとされるのは、次の藩庁記録である「毎日記」と「津島紀事」である。

①「毎日記」正徳4年11月13日に「長崎役方より琉球芋小数千三百調へ渡され候に付」(前掲(2)1.『郡方日帳書拔』正徳4年11月13日参照。)

②「津島紀事」(文化6年(1809)5月)¹²⁾

正徳4年(1714)に長崎役平田三左衛門が、「種子ヲ長崎ニ求メ諸根千三百ヲ送ル」とある。原田三郎右衛門については、「種殖の術を各村に教書した」者として記述されてい

る。

ところが、前掲(2)の3.「郡方毎日記」(正徳5年12月1日)によると、前年(正徳4)に藩が長崎役ルートで調達した琉球芋(唐芋)1300個の種芋の植立ては成功しなかった。従って、上の二つだけの史料だけでは、長崎役の孝行芋の源流説は説得力をもたない。一方の原田三郎右衛門が正徳5年(1715)に薩摩に潜入して種芋を持ち帰りとする説は、それを証明する一次史料はなかったが、前掲(2)の毎日記では原田三郎右衛門が他方(他国)より買い求めた唐芋であることがわかった。また、享保元文諸国産物帳集成「対馬国」には、琉球芋や孝行芋(薩摩芋・唐芋)が記載されている。従って、薩摩に潜入して種芋を持ち帰りとする説は支持できない。

ところで、孝行芋の呼名については、陶山鈍翁は、1722年の「老農類語」で、「此ノ芋ヲ正徳五年以来毎年種フル」としているように、当初は孝行芋と呼ばれていない。その呼名は、同4.「毎日記」(享保7年8月9日)の記事と1722年の「老農類語」から、1722年以降から呼称されていると考えられる。さらに、同5.『毎日記』(享保8年8月25日)「三郎右衛門と申す者、他方より孝行芋の種子を買い来り」や同6.『毎日記』享保九年八月八日関連「三郎右衛門他国へ罷り越し、孝行芋の種を買い調へ」から、他国へ入って買ったとしているが、残念ながら国名は明記されていない。しかし、謙讓語の「罷り越し」を使っているので、これは上司の指図があっていると考えられる。

以上から、孝行芋は、長崎役とは別ルートで、恐らく原田三郎右衛門が長崎へ行っ

て買って来た唐芋（薩摩芋）・琉球芋と考えられる。原田三郎右衛門が藩の許可なしに独断で他国へ行ったとは考えにくい。この背景には、対馬藩の重臣であった陶山鈍翁が甘藷を山畠の多い対馬藩の食糧不足解消対策に最も効果があると考えていたので、篤農家で御郡方走り番の原田三郎右衛門を選んで、他国で甘藷栽培のノウハウを習得させたのであろう。今後のさらなる研究を期待したい。

6 日韓の食文化交流を果たす孝行芋

江戸時代に隣国の朝鮮から外交使節としての通信使が、慶長12年（1607）から文化8年（1811）にかけて12回来日、通信使は朝鮮王朝から派遣され、徳川幕府はこれら使節一行を歓迎することにより、江戸期を通して日本と朝鮮の友好関係が続けられた¹³⁾。対馬藩は、徳川将軍の襲職を賀す朝鮮使の来日には、これを江戸まで案内するのが慣例となった¹⁴⁾。そこで、通信使が記録した中に、次のとおりサツマイモのことが記されている。一つは、1719年、通信使製述官として訪日した申維翰^{シン ユ ハン}が著わした『海游録』^{かいゆうろく}の「16 琵琶湖畔を往く一大津、守山、佐和（彦根）一」には、「村落はあるいはまばらであるが、居人はそれぞれ酒、餅、煎茶、焼芋を用意して路傍に並べ置き、通行人を待って銭をかせぐ」¹⁵⁾。また『海游録』末尾の『日本聞見雑録』（付篇）には「芋の大きいものは盃（椀）の如く、それを割って焼いて売る。人は争って、飢えをしのぐためにこれを取る」¹⁶⁾とある。このように京都から近江の天津に至る沿線の茶店で焼き芋が売られていることがわかる。二つは、宝暦度の正使趙曦^{チョオム}の使行録

「海槎日記」^{かい さ に つ き}によると、趙曦は対馬の佐須奈浦に着いた時（1763年）にさつまいもを求めて釜山に送り、帰路にもさつまいもを持ち帰り、さつまいも栽培に気候の合う済州島や釜山周辺に救荒作物として広めるとした。さつまいもの特徴と日本での栽培などについて次のように記している¹⁷⁾。

対馬に、根を食べる甘藷あるいは孝子麻がある。やまのいも、かぶら、うり、さといものような形をしており、形は一樣でない。（中略）味はやまのいもよりややしっかりしており、くりのようでもある。生でも、焼いても、煮てもよい。粥に入れてもよく、正果や餅を作ることもでき、飯に入れてもよい。救荒作物に適している。甘藷は南京から日本に伝わり、日本各地の陸地や諸島で作られ、なかでも対馬で盛んに作られる。

鄭大聲著『食文化の中の日本と朝鮮』によると、朝鮮語で「コグマ」と呼ばれるさつまいもは、日本から朝鮮に伝わり、その呼名は日本語の「孝行芋」が訛ったとされる¹⁸⁾。

ところで、佐々木道雄氏の『サツマイモとジャガイモ』¹⁹⁾によると、サツマイモの存在は、早くから朝鮮に伝わっていた。『李朝実録』には、「顯宗四年（1663年）南海県民・金麗暉（キムヨフィ）らが琉球に漂着し、皮が赤く肉が白く、ふかして食べると味がヤマイモのようなものがあり、これを食べて空腹をいやした」とある。韓国では、本格的栽培は「海槎日記」^{かい さ に つ き}にあるように、対馬の孝行芋の伝来から始まっているようだ。

以上のことから、対馬の孝行芋が救荒食

として韓国へ伝来していることが分かった。なお、『いも類振興情報103号2010.04』キム オッキョン・夏秋啓子氏「続旅の空、時々地のいも韓国編」に趙曦の「海槎日記」(1764年)のことが記載されている。

7 おわりに

拙稿のテーマの諸国産物帳にみる対馬国「孝行いも」の実態を考察した。また「孝行いも」が江戸期に日韓の交流文化に寄与していることが確認でき、改めてサツマイモのすばらしさを味会うことが出来た。拙稿では、各位の研究成果を引用した。ここに感謝し御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 「対馬藩」『長崎県史 藩政編』(長崎県、昭和48年) 1069頁。
- 2) 「対馬に渡った甘藷—孝行芋」『記念誌野国総管』(沖縄県嘉手納町「野国総管甘藷伝来四〇〇年祭実行委員会」2006年) 140～156頁。
- 3) 『日本史辞典』(角川書店、1997年) 580頁。
- 4) 「解題」『日本経済大典第七巻』瀧本誠一編纂(明治文献、昭和41年) 4頁。
- 5) 「対馬藩」『長崎県史藩政編』(長崎県、昭和48年) 1003頁。
- 6) 『日本近世人名辞典』(吉川弘文館、2009年) 515頁。
- 7) 山田尚二著『さつまいも—伝来と文化』(春苑堂出版、平成6年) 158頁。
『松岡先生番藷録 全』国立国会図書館、特1-39、初めの章に「稲若水云赤黄者性粘白者不粘不粘為上品粘者為下品特梗糯之異耳」とある。
- 8) むくげの会編『新コリア百科』(明石書店、2001年、429・430頁)
- 9) 『享保元文 諸国産物帳集成 第XI巻 対馬・肥前』(編者盛永俊太郎・安田健、発行所科学書院、1993年) 79頁。
- 10) 「壱岐国産物考」『享保元文 諸国産物帳集成 第十八巻(補遺編Ⅱ)』(編者盛永俊太郎・安田健、発行所科学書院、1991年) 481頁。
- 11) 『藩法集8』(鹿児島藩上、藩法研究会編、創文社、昭和44年) 216～220頁。
- 12) 前掲註2)「長崎役甘藷伝播説と三郎右衛門の功績」『記念誌野国総管』148～151頁。
- 13) 高正晴子著『朝鮮通信使をもてなした料理』(明石書店、2010年) 3頁。
- 14) 執筆者・永留久恵氏「府中藩」『藩史大辞典』第7巻九州編(雄山閣、昭和63年) 261頁。
- 15) 姜在彦訳註『海游録』(平凡社、東洋文庫252、1974年) 145頁。
- 16) 前掲註15)『海游録』285頁。
- 17) 前掲註13)『朝鮮通信使をもてなした料理』196・197頁。「海槎日記」(写本一冊〔韓国国立中央図書館蔵〕)(辛基秀・仲尾宏編「善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使」『第七巻甲申・宝暦度』(明石書店、1994年、145頁) 参照。
- 18) 前掲註14)『朝鮮通信使をもてなした料理』196頁。
- 19) 前掲註8)『新コリア百科』432・434頁。